

海外研修を通して感じたこと考えたこと

薬学部 薬学科 6年

06097207

伊藤 理恵

私は平成 23 年 6 月 5 日から 6 月 19 日まで、アラバマ州の最大都市バーミンガムにある Samford University（以下サンフォード大学）および周辺の病院や薬局にて海外臨床薬学研修をおこなった。私は医療先進国といわれるアメリカの薬剤師の活動や業務に興味があり、また実務実習やアドバンストコースで遭遇した問題や疑問についてアメリカの薬剤師の意見や考えを聞きたかったため、今回の海外臨床薬学研修に参加した。

今回の海外研修で私のグループは、Christ Health Center, St.Vincent' s East Family Medicine, Western Health Center,（以上日本でいう診療所にあたる施設）, St.Vincent' s Hospital 内にある Oncology（腫瘍科）, Southern Medical Services（IVH や TPN の調製/配達専門薬局）, Homewood Pharmacy（OTC 販売と処方せん受付をしている薬局）、Jefferson County Department of Health（保健所）, Samford University Global Drug Information（サンフォード大学の DI センター）を見学した。

私は海外臨床薬学研修に参加する前、アメリカの薬剤師は医師の指示がなくてもワーファリンの用量調節ができる、患者の血圧測定ができる、INR 測定ができるなど、日本の薬剤師と比べてできることが多いということを大学の授業等で聞いていた。研修中には、アラバマ州では薬剤師だけではなく、学生のうちから INR 測定や血圧測定をやっていて、診察時には医師だけではなく薬剤師が同席し（Pre-Pharmacy を終えて 4 年後の実習中は学生も同席する）薬物療法だけではなく、患者へ治療中の生活に関してアドバイスしていることを知った。アメリカでも薬剤師が調剤し電子カルテを見て薬物治療のモニタリングをしていたが、日本と比べて、薬剤師は患者や他の医療従事者の顔が直接見える場所により多くいるという印象を受けた。アメリカには Pharmacy Technician（以下テクニシャン）と呼ばれる職種があり、棚から薬を取ること、調剤（錠剤、水剤、製剤、注射剤のミキシング）、薬や製品の充填、薬のパッケージング、抗がん剤や麻薬の調剤・調製ができる。テクニシャンという職種を設ける事についてアメリカの薬剤師は当初反対していたが、テクニシャンが調剤を担当し、薬剤師は患者との面談や薬物療法の説明、患者からの相談を聞いたりすることに時間を割けるようになり、結果として薬剤師の活躍の場が広がり、その認知度も上昇した。研修中に会った薬剤師の先生が、生活と薬物療法がうまく共存し合うように患者と向き合う姿や患者がその先生に悩みを告白しているところを見ていて、患者と接する時間が多く持てるような環境があることは素晴らしいと思った。

日本では医薬分業が進み、診療所（またはクリニック）には薬局がないところが多く、いわゆる門前薬局がその代わりに担っている。しかし研修中に見学した診療所では薬局が同じ施設内にあるところばかりであった。同じ施設内に

患者の主治医（処方医）がいるので、薬物治療や副作用についてすぐにコンサルトし合うことができる。そして医師や薬剤師、看護師だけではなく、カウンセラーや Medical Assistant と呼ばれる職種の人々がいて、診療所でも多職種によるチーム医療が行われていることを知った。

また研修前、アメリカの人々は大家族で住んでいるイメージを持っていたが、アラバマ州の薬剤師の先生によると、成人後大都市で働くようになり結婚したりすると実家を離れる人が多いとのことであった。したがって医療施設が近くにないところに老夫婦のみで暮らしており、介護者がいないという場合がよく見られる。アメリカはとても大きな大陸であり、大都市であれば受けられる医療を田舎に住む患者は受けられないという場合もある。アメリカは貧富の差が激しく保険加入の有無が医療に影響するという金銭的な問題だけでなく、地理的な問題も医療に影響すると考えられる。アラバマ州ではこのような問題を解決するため、Southern Medical Services のような在宅医療に特化した施設ができたのだと思った。今後、日本にも在宅医療を専門とした薬局が必要となってくると思っていた私は、アメリカにはすでにこのような薬局があるということを知り、サービス内容や処方せんの受取方法、連携を取っている医療従事者について学ぶことができたことは、私が将来調剤薬局の薬剤師になったときにとっても有用であると思った。

今回の海外臨床薬学研修は、アメリカ人は部屋をシェアすることが好まないからほぼ全室個室であること、日本では告知を拒む患者がいる疾患（がんなど）でもアメリカ人の気質上診断結果はほぼ必ず告知すること、Poverty Level というものが存在し保険加入の有無だけが患者の受ける医療に関係するのではないこと、初回がん化学療法であってもほとんど外来治療が行われることなど、日本の医療や実務実習をした施設とは違ったアメリカの医療にたくさんふれることができた充実した15日間だった。サンフォード大学や研修施設にいらっしゃった先生方は、私の拙い英語の質問に真摯に答えて下さったので、言葉の壁にめげることなく研修を終えることができた。アドバンストコースで、多くのがん患者と接した私には、St. Vincent's Hospital の Oncologist である薬剤師の先生の「No meet, No treat」というメッセージが心に強く残っている。